

『嵐が丘』の保守性

——近親相姦、情熱恋愛、悪魔主義、結婚愛をめぐって

大熊昭信

『嵐が丘』はタイトルからしていかにも魅力的である。だが、ほくらはその魅惑の呪力に捉えられ、久しく作品本来の姿を見失ってきたのであるまいか。嵐の吹きすさぶ荒涼たる荒野を背景に展開される——モデルとなった現実のハワースは穏やかで地味豊かな丘陵であるが——キャシーとヒースクリフのまことに嵐のようなロマンスにてもなく目がくらんでしまったのだ。だがひとたびこの小説を読者の勝手な思い入れや作者の心情への忖度といったものから離れ、形式や、さらには作品が提示している客観的な事実を冷静に検討するとき、そこにはあきらかに別様の姿が忽然と立ちあらわれてくる。

(1) 近親相姦——キャサリン一世とヒースクリフ、ネリーとヒンドリーの場合

とはいえ、この小説の客観的な事実を愚直なまでに冷静に追求した例がないわけではない。たとえば今では邦訳にまで挿入されている登場人物の関係図(4/28)。これは文学研究とは無縁の事務弁護士サンガーが一九二六年に作成したものである(川口50、廣野101)。作品に惑溺するのではなくその事実を突き放して観察するのは感激症の小説愛

好家やら、伝記や文学史などで頭がいっぱいの文学研究者にはどうやら出来ない企てだったらしい。それが明示しているのは、嵐が丘のアーシヨウと鵜が辻のリントン両家の家系とその姻戚関係であり、キャサリン二世(以下キャシーはキャサリン一世、またその娘をキャサリン二世と呼ぶ)とリントン・ヒースクリフ、キャサリン二世とヘアトン・アーンシヨウの結婚がじつは交叉従妹婚であったという事実である。これは興味深い発見であり、ひとつの手柄といていい。だが、ほくらにとつて残念なのはその事実を確認しただけで思考停止していることである。それはサンガー以後の研究を受けてより精密な『嵐が丘』の年代記を作成した廣野由美子の場合にもかわりはない(26)。

よく知られているように交叉従妹婚はレヴィイストロースがアメリカ・インディアンやオーストラリアの先住民の婚姻制度を取り上げた際に触れている。そして一般的には親族の近親相姦を禁止するため、その予防策として複数の部族間で従妹を順繰りに交換することが制度化されたと述べている。関連のある部分を抜き書きしておこう。「われわれが定義したような親族の基本単位「実の兄弟姉妹、夫と妻、親と

子の関係」の本源的で還元不可能な性格は、実は世界のどこでも例外なしにまもられている近親相姦の禁止の結果である。近親相姦の禁止とは、人間社会において、男が女を獲得するには、これを別の男から得るよりなく、後者は女を娘なり姉妹なりの形で前者に譲渡するということである。したがって、なぜ母かたのおじが親族構造の中にあられるかを説明する必要はない。おじはそこに現れるのではなく、そこに直接に与えられており、その構造の条件をなしているのである」(53)。そしておじの登場するこの構造が形成するのが交叉従妹婚なのである。レヴィーストローヌは別のところでこういっている。「私は別の著作において、婚姻による交換の基本的様態を三つの形に区別した。その三つは、双系的交叉いと、間の優先婚、姉妹の息子と兄弟の娘のあいだの婚姻、兄弟の息子と姉妹の娘のあいだの婚姻として示される」(137)、と。

そうした視点からこの図を検討すると『嵐が丘』の二つの家系の間にもその近親相姦と禁忌が描かれていることに、はたと思い当たる。むろん、近親相姦は今日でも週刊誌を賑わしているし、ジョン・フォードの『わが名は娼婦』やブロンテの時代の直前でもワーズワスやもつとはつきりとはバイロン卿の実生活など実例に事欠かない。したがって近親相姦は決して過去のものではない。だが、近親相姦とそれを否定する交叉従妹婚という人類学的な歴史的事実がこの小説ではひとつの枠組みとして提示されているのである。なるほどキャシーとヒースクリフの熱烈な相思相愛こそがこの小説の人気の公然の秘密である。

作品の前半を念頭にジュールジュ・バタイユは、『嵐が丘』の主人公たち、キャサリン・アーンショウとヒースクリフとの結びつきほど適切に、以上のようなこと「つまりエロチスムとは、死を賭するまでの生の賛歌ではないか」を具現しているものはない(7)と書き留めている。またモームは「恋愛の苦しみ、法悦感が、これほど力強く描きだされている小説を、私はほかに一つも思い出すことができない」(178)などといっている。だがキャサリン一世とヒースクリフは兄妹同然に育てられているわけで、二人の恋は近親相姦的なのである(廣野27)。しかもこの小説は二人の近親相姦的恋愛を否定している。まずもってそれはすでにふれた交叉従妹婚に窺える。そればかりではない。小説は周到にも、もう一組の近親結婚の候補をあげ、ぬかりなくそれを回避させている。

近親相姦の禁忌を犯す可能性があつたのは、キャサリン一世とヒースクリフばかりではない。これはあまり注目されていないが、ヒンドリーとネリーもまたそうである。ネリーは語り手であり、自分のことは誤魔化したりしてはつきり言わない。だが、ヒンドリーとは自分の母親が乳母であつたことから「乳きょうだい」(385)であり、キャサリン一世とヒースクリフよりも深い近親関係にある。少なくともネリーにとつて浅からぬ関係だつたことは、ヒンドリーが死んだ時、ネリーはキャサリンの死よりショックで、エドガーから暇をもらつて嵐が丘にあと始末に出かけている(284、285)。しかしそんなネリーとヒンドリーは結ばれない。ヒンドリーはロンドンでどこの馬の骨とも知れぬ女性

フランスと結婚するからである。しかもこれは典型的な恋愛結婚なのである。してみると、ここで二組の男女が近親関係にあるが一方は近親相姦に陥り、他方はそれを回避しているという事例がそれぞれ客観的にだまって提示されていることになる。そのうえで、作品の事実としては、キャサリン一世とヒースクリフの近親相姦は、キャサリン二世のリントンやヘアトンとの交叉いとこ婚ではつきりと否定されている。してみれば、『嵐が丘』はさながら近親相姦とそれを否定するために導入された交叉いとこ婚という婚姻の歴史の系統発生を語っているかのようである。そこで、ほくらとしては、たとえ否定されているにしろキャサリン一世とヒースクリフの情熱恋愛の作品での意味を理解するためにも、イギリスにかかわる近親相姦や交叉いとこ婚を含めた愛の歴史を概略ここで振り返る必要がある。

(2) 情熱恋愛

いままがた情熱恋愛といったが、なにも一般的な普通名詞としてキャサリン一世とヒースクリフの恋愛を形容したわけではない。それはドニ・ド・ルージユモンが一二世紀フランスはプロバンス地方の宮廷で誕生し、以後西欧の愛の形を決定した恋愛形態を指している(96〜97)。それは不倫であるが、肉肉関係を伴わない精神的な純愛であり、それこそ一言で言って恋愛のための恋愛、恋を恋する恋なのである。愛を愛する愛だ(44)。

西欧の中世では騎士は主君に忠誠を誓う封建道徳に従っている。だ

が、その裏で主君ならぬ主君の奥方に愛の忠誠を誓うという一種秘儀的な宮廷作法があった。これは下世話には上流の婦女の政略結婚によって満たされない情緒的不满のはけ口となつたものだろう。さらには広く言えば、キリスト教の結婚観にたいする反動として出現した。ところがその思想的背景にはカタリ派の影響があり、たんなる欲求不満や批判だけからなるのではない。むしろ悪の創造した物質的な現世を否定し、現世の一切の希望を断念して、精神的な来世での救済を期待するという厳格な秘教がそこにはあった。その愛はあくまでプラトニックで禁欲的であり、けつして肉体的な結合を求めものではない。ルージユモンは『トリスタンとイゾルデ』(13〜67)をその典型としてとりあげ、それは『ロミオとジュリエット』やロマン派をへてワーグナーによつて完成されたとしている。そしてそれが今日の恋愛の作法にも影響を与えているというのである。早い話が、『嵐が丘』でも自分に一目惚れしたイザベラにたいしてヒースクリフは「ロマンズのヒーロー、騎士みたいに」(313)扱われろと思つたら大違いだなど毒づいている。これはまさに情熱恋愛の世俗化した形を踏襲したものである。ロックウッドがキャサリン二世との「ロマンチックな成り行き」(627)を妄想するのもそれである。ほくらがてもなく恋愛に感動してしまうのはじつはそうした伝統の力による。

ところでキャサリン一世とヒースクリフの恋愛は、性に目覚める以前を除くすれば、この情熱恋愛のそれである。キャサリン一世は一種の打算でエドガーと結婚する。そしてヒースクリフが行方知れずのと

きは十分しあわせな結婚生活を送る。が、ヒースクリフが帰還するとたちまちその愛を蘇生させ、持続させている。これは中世の奥方のように結婚しつつ不倫の純愛を貫いている姿だ。そして(キャサリン二世はヒースクリフの子であるという説もあるが)ぼくらのみるところ、キャサリン一世とヒースクリフの間にはふしぎなことに肉体関係はどうやらない。情熱恋愛の掟を順守するかのように肉体的にはきわめて禁欲的なのだ。キャサリン一世のヒースクリフへの愛は有名な台詞「わたしはヒースクリフと一つなのよ I am Heathcliff (172/82) とか「だって、彼「ヒースクリフ」は私の魂のなかにいるんだから」(333)などで端的に表現されるが、これは肉体ではない精神的な愛による合一を告げている。そればかりではない。キャサリン一世は病に倒れ、ヒースクリフとエドガーとのあいだの悶着に耐えがたくなると、「この崩れかけた肉体という牢屋」を離れて「あの輝かしい世界に早く逃げ込んで、ずっとそこにいたい」(333)などという。この台詞はまさに現世や肉体を否定するカタリ派的なものといつていいだろう。

ヒースクリフにしてからがそうである。それが明確になるのは、とりわけロックウッドがキャサリン一世の幽霊の出現をみたときからである。ヒースクリフは復讐意欲を喪失し、ひたすらキャサリン一世の亡霊を追いかける。思いつめたように肉体の合一ならぬ霊の合一を求めている。いかにもカタリ派的な情熱恋愛の理想の追求である。しかもその幽霊としてのキャサリン一世の幻と合体するまでの自殺行為のプロセスは、アンダーヒルがその『神秘主義』でいうような神秘家の

神との合一体験のプロセスである回心、浄化、照明、魂の闇夜、合一を彷彿とさせる(169-170)。いささか恣意的だが、ロックウッドがキャサリン一世の亡霊を見たあとヒースクリフはエドガーとキャサリン一世の墓を暴く際、キャサリン一世の霊の気配を感じるが、これは回心の段階。日々の暮らしに興味がわかず、何を見ても彼女を思い出すようになり、ついには絶食にいたるのは浄化、照明の段階。「魂の至福はこの身を滅ぼしてなお飽くことをしらんのだ」などと呟くのは魂の闇夜といつていい。そして絶命したヒースクリフの表情はまさにベルニーニの『聖テレジアの法悦』で描かれたキリストとの聖婚を幻視する聖女然としているのだ。「その生きているような歓喜のまなざし、半開きの唇とがったような白い歯までがせせら笑うみたいで」(680) あったというのだから。これはカタリ派の現世を否定し禁欲的に神のみを思う態度に通じる。ただそれが神ならぬキャサリン一世であるということに情熱恋愛たる所以がある。

したがってキャサリン二世の恋愛や結婚が否定したのはこうした情熱恋愛ということになる。キャサリン一世と二世の生涯は前者の死が後者の誕生であるという点がその新旧交代を明確にしているばかりではない。廣野が指摘しているところだが、キャサリン一世とエドガーとの結婚年齢は二世とヘアトンそれと同じ18歳なのである(109)。ちなみにキャサリン一世は19歳で死ぬが、ヒースクリフはその二倍の38歳で死亡する。こうしたいかにも仕組まれたような幾何学的なまでの対照性が随所に際立っているが、そのぶんキャサリン一世のキャサリン

二世による否定が鮮明となっているのである。

ではキャサリン一世とヒースクリフとの恋愛には救いはないのかという作品はそれをちゃんと用意している。だがまたしてもそれはキリスト教公認の結婚愛ではない。キャサリン一世はヒースクリフとエドガーの間にたつての煩悶のために病に伏せるのだが、その際、霊界を希求するだけではない。もうひとつ幼いころの、つまりは性に目覚める以前にヒースクリフと過ごした荒野での野遊びの愉悅を懐かしがっている。「ヒースのなかに立てば、たちまち自分らしい自分をとりもどすはず」(263) だというのである。これは童心に、無心に帰れということだ。こうした童心はキャサリン二世にないわけではない。これはあとでふれる。だがキャサリン一世のそれはキリスト教には背を向けたものである。たとえばキャサリン一世はこんな夢の話をしている。天国に行った夢をみたが、そこに居づらいうので降りてきたら、そこが二人で遊んだ荒野だったので安心したというのだ(168/80)。また二人の密会の場所である「ペニストンの岩」(257/123)には妖精の洞穴があるのであり、なんとペニストンはその名も形状もペニスを連想させる。まことにキャサリン一世の救いの空間は異教的なものに満ちている。だとすればキャサリン二世の否定にはこうした異教的要素も含まれていることになる。

じつはこの異教的なものは単に妖精信仰といった土俗的なものではなく、もっと宗派的な異端的なものであったのかもしれない。たとえばキャサリン一世が死んだ後今は神のおそばで憩っているでしょうな

どネリーがというと、ロックウッドはその台詞に異端的なものを感じて応答を差し控えるというシーンがある(345)。これは死後の魂は新教ではすぐに昇天するのではなく、最後の審判まで別の場所に留まるという教義と齟齬があつたからだろう。だが、この直接天国に昇天し、しかもこの世の身体のまま昇天するという異端的言説はスウェーデンボルグの、新エルサレム教会の教説である。また、キャサリンが「わたしはヒースクリフと一つなのよ」とか「ヒースクリフは私の魂のなかにいる」というとき、じつは男女合一つまり両性具有の理想を語っているのかもしれない。スウェーデンボルグは結婚愛の究極は男女の精神的な文字通り合体であると語っている(大熊131)。そしてコールリッジは一八三二年九月一日の「偉大なる精神」というタイトルの談話のなかで「偉大な精神というものは男女の区別のつかないものでなければなりません」といってスウェーデンボルグに言及している(300)。なによりもブレイクはアンドロジニーとヘルマフロditosを大々的にその神話に取り入れている(大熊122以下参照)。ちなみにエミリーは筆名を男性名にしたのだが、これはたんに男性社会の圧力に負けたためというよりもその両性具有的な理想への志向のゆえかもしれない。そうしてみると、やがてみるキャサリン二世とヘアトンの恋愛はキャサリン二世が自分にぞつこんだが野卑で無知なヘアトンを知恵へ導くというものだが、二人の結婚は愛Ⅱヘアトンと知恵Ⅱキャサリン二世の結婚が寓意されているとも読める。だとするならばスウェーデンボルグが『結婚愛』で再三語っている結婚愛の理想、愛と叡智の合体と

同じである(83)。「嵐が丘」には、つまりはエミリー・ブロンテにはスウェーデンボルグの異端的要素が最初からひそんでいたのかもしれない。とはいえ残念ながらいまのところこれを歴史的に証拠立てる資料は手元がない。

それはそれとして、そうしたキャサリン一世は死後ムーアをさ迷うとされている。作品の冒頭、ロックウッドの夢枕に立つたキャサリンは「もう二〇年になるの。おうちに帰れずにさまよって二〇年!」(51)と嘆いている。また作品の末尾には荒野をさまようキャサリン一世とヒースクリフの亡霊の目撃談がある(691、692)。これは子供時代の無垢な幸福が再演されていることを示していると解釈できる。じつさいウィリアム・ワイラー監督の映画『嵐が丘』はまさにこうした情熱恋愛賛歌の視点から撮られている。とはいえ、キリスト教的にみれば、ロックウッドに亡霊として出現したキャサリン一世はさ迷えるユダヤ人のように天国から追放されて業罰を受けていると読むのが自然だろう。

ところでキャサリン一世はヒースクリフとの兄妹同然の睦みに育んだ愛情を、悪いと知りつつエドガーとの打算的な結婚で裏切る。結果としてヒースクリフの復讐心を生み出し、自分は緊張した不倫状態に陥ることになる。ブレイクに『無心の歌』と『経験の歌』があるが、これはまさに幼童の無心から大人の打算という経験の世界にキャサリン一世が踏みこんだということである。そしてその経験世界の苦渋からの解放の手立てとして無心へ回帰することを求めたのだ。じつさい、

バタイユは『文学と悪』でそのように読んでいる。「おそらくこの恋は、野生的な少年時、まだ社会の因習的な礼儀作法の掟には矯められていない少年時の自由を、断念すまいという意志に換言することもできるだろう」(9)。

だが、ブレイクにしてみれば、無心への回帰は経験の苦渋を激越に経験することで根源的な無心つまりは幼童の無心ではない大人の無心に到達することを推奨している。経験世界で地獄を経験するのだが、それを天国的な倫理で批判し、天国的なありかたに回帰するのではなく、地獄と天国を相対化する地点にたつことを推奨するのである(大熊17―18)。つまり『天国と地獄の結婚』を提示するので。天国的な倫理で否定される性愛を極限まで追求することで、過剰なまでに経験することで初めて人は肉体という限界に閉じ込められている地獄を乗り越える本来の生命のもつ知恵に到達するというのである。まことに「過剰は知恵の宮殿への道である」という次第だ。ロレンスはといえば、そうした事態を性愛をとおしての宇宙的生命との合一と表現している(大熊156―158)。

キャサリン一世とヒースクリフとの過剰なる情熱恋愛には、やがてみるキャサリン二世の結婚愛と同様に、情欲や生な欲動としての性愛も、さらにはそのような理想に到達する過程としての性愛も描かれていない。ではこの作品で取り上げられているもう一つの過剰、ヒースクリフの悪の場合はどうだろう。

(3) 悪魔主義——ヒースクリフの表象するもの

『風が丘』では、登場人物のだれもが寄ってたかつて、機会あるごとにヒースクリフを色黒でジブシーみたいとかまるで悪魔だなどと評している。なによりもヒースクリフを拾ってきたアンシヨウそのひとが「もつとも、悪魔 the devil から生まれたかと思うほど、真っ黒な dark なんだがね」(73/34) などと言っている始末だ。夫人も夫人で「あなたッ、よくもこんなジブシー小僧 baby face をつれてくる気になれますね」(74/35) などと難詰している。素直な読者は、会ったこともないのだから、ヒースクリフをそのように看做さざるを得ない。またヒースクリフが三年間不在のち羽振りが良さげなって帰還すると戦争にいつていたのではないかなどの推論を読むことになる。それでアメリカ独立戦争に(黒人奴隷の仲間として?)参戦し、略奪などで一山当てたなどと邪推する羽目になる。するとそうした憶測もまた作品がぬかりなく保証してくれるのだ。ほかならぬネリーが三年ぶりのヒースクリフの第一印象を「軍隊生活がうかがい知れるようでした」(201)と証言しているし、ヒースクリフに「兵隊にでもいつてたの」(196)と問い糺している。ロックウッドも「アメリカへ逃れ、独立戦争で、自分を育ててくれたイギリスを痛めつけて出世したか?」(191)などと推測している。そこでヒースクリフの表象するものは、ポストコロニアリズムの観点からすれば、イギリス植民地主義に抵抗する虐げられた黒人ということになる。すくなくとも作品はそのように読むよ

うに読者に促している。語り手二人がそう言い募っているのだから。これは『ジェイン・エア』ではジャマイカの農園でひと財産築いた伯父さんの遺産を相続したジェインが——植民地主義には無批判に——ロチエスターとめでたしめでたしとなることと違う点である。とはいえ、『風が丘』でもそうしたヒースクリフは、やがて検討するが、あっさり消去される仕儀となっていることも忘れてはならない。『風が丘』の保守性が明確に現れているところだからだ。

すでに指摘したようにヒースクリフは黒人奴隷の末裔ばかりか悪魔をも表象している。これもまた最後にはヒースクリフとともに排除されるのだが、この悪の意味はもう少し明確にしておく必要がある。そもそもヒースクリフの極悪非道はすべては幼き頃のヒンドリーのイジメやなによりもキャサリン一世の裏切りにたいする復讐心に端を発している。ヒースクリフの悪への意志はそこに淵源している。その具体的な形が、アンシヨウ家とリントン家をととり、その子供の世代に自分の子供時代に甘受した苦悩を追体験させるといふ非行となったのである。しかもそれは『金色夜叉』の貫一の復讐心をはるか越えた過剰なまでの邪悪な——まさに悪魔的な——怨念なのである。

たとえばヒンドリーの財産を賭博で巻き上げる。そればかりかついには泥酔の果ての死に迫いやる。これには最後を看取ったのがヒースクリフだったというジョゼフの証言からヒースクリフが手を下したのではないかと推論が成り立つ。実際サザーランドはそうした点からヒースクリフは殺人者かと問うている(64~70)。そればかりではな

い。殺人(リントンに医療を受けさせないで死に至らしめた未必の故意)、動物虐待(イザベラの犬を吊るす)、墓暴き(キャサリンの墓を掘り返す)、死姦(キャサリンの死体に接吻)、謀略結婚(イザベラとの結婚、リントンとキャサリン二世の非合法的結婚の強要、DV(イザベラにたいする精神的肉体的暴行)、児童虐待(幼いキャサリン二世、リントン・ヒースクリフへの仕打ちとヘアトンに教育を受けさせないで野人のままにしておく意図的放任) などなど。これはいったいどうしたことか。

ひとつには情熱恋愛の基本にあるカタリ派的なこの世とあの世の善悪二元論的な世界観の提示というのが考えられる。ヒースクリフは情熱恋愛の当事者であるとともにさながらその背景の設定者でもあるのだ。それは物質世界のこの世は精神の牢獄であり、あの世にしか救いはないという風景である。こうした二元論的な思想はルターなどにも見られるものである。この世は悪魔の支配するもので、あの世でのキリストによる救いしかないという世界観だ。ルターはこう言っている。「悪魔はこの世の王である。世界は高利貸、貪欲、高慢、淫売、姦淫、殺人、窃盗、神への冒瀆やその他のあらゆる罪なしでは立ち行かない。そうしたものがなければ世界は世界ではなくなる」(Brown198)、と。実際、すでにみたがヒースクリフは、高利貸(ヒンドリー)、高慢(エドガー)、淫売(イザベラ)、姦淫(キャサリン)、殺人(ヒンドリー)、窃盗(財産の乗っ取り)、神への冒瀆(神の存在や信仰の否定)とルターの列挙するすべての悪の体現者なのである。しかもヒースクリフはそ

うした悪魔的行為を自覚的に意志している。ヒースクリフの悪魔主義という所以である。

仕上げは自死である。ヒースクリフは復讐が完遂され悪逆無道の極みに到ると、つまりは悪魔の支配するこの世が十全に経験される段になると、ヒースクリフは自死を企てる。自殺は公になると教会に埋葬されない罪なのでネリーは嘘までついて秘匿している。それで未必の故意としての死を企てる。その意図はといえばひとえに死んで故人となつている恋人と霊界で合体することである。トリスタンとイゾルデ、ロミオとジュリエットのように、まことにそれは情熱恋愛の成就である。しかもそれはヒースクリフがいみじくも「俺の天国に手が届きそうだ」(686)というように、あくまで自分の天国であつてキリスト教のそれではないし、カタリ派のそれでもどうやらならない。自分の魂を神ではなく、ひとりの女への狂熱という悪魔に売り渡したということだろう。まことにこれは神への冒瀆の極みというべきか。

こうしてみるとヒースクリフの態度は確信犯としての反キリストであり、その意味で『嵐が丘』はヒースクリフの悪魔主義の具現であると読める。これをもう少し具体例で補完しておこう。たとえばネリーは臨終のことを話題にしたヒースクリフに「数々の悪事を懺悔しなくてはね」(684)と諭す場面がある。すると、ヒースクリフは「悪事の懺悔云々をいうが、俺は悪事など働いたことがないんだから懺悔する必要もない」(685)と突っぱねる。どうだろう、どうやらヒースクリフは世間で言う悪事など眼中になく、それとは別の善悪の判断の視点(悪

魔主義)にたっているといえまいか。つまり単なる金もうけといったものではなく、復讐の情念(「奴らの破滅を楽しむ力」(665)、情熱恋愛の欲動——キャサリン一世という「普遍概念」(668)をつかみたい衝動——)に突き動かされての振る舞いであつて、もはやそれは俗物の善悪判断の越えているというべきだろう。しかもヒースクリフは自分の求めるのはあくまで「自分の天国」であつてキリスト教の天国などではないと嘯いている。してみればヒースクリフは、あきらかにアンチ・キリストであり、バイロンやサドに比肩できる天晴れな悪魔主義者になりおおせているといつていい。

だが、その恋愛が究めてプラトニックで禁欲的であるように、それが妙に自虐的である点がヒースクリフ的であるかもしれない。子供に對して苦痛を与えるヒースクリフは自分をも同時に苦しめている。「おれはあわれまん!おれはあわれまんぞ!地虫がのたくればのたくるほど、おれはますます踏みにじつて、臓腑をさらけ出させてやりたくなのだ。一種の精神的菌痛だな、だからおれは痛みが増せば増すほど、よけいに力を入れて、うづく歯をかみしめるのだ」(257)。ここにはサディズム(弱者を踏みにじる)とマゾヒズム(自分の菌痛をかみしめる)が併存しており、他者への攻撃が同時に自分の痛みになっている。そうした行為をあえて求めるといったところに、通俗の倫理のかなた、善悪をこえた境地にヒースクリフは到達していたと解釈される。

じつさいヒースクリフの悪についてバタイユはこう解釈している(27)。

悪のなかには、つねに極悪へとむかうひとつのずれがあるので「……」無欲な死への誘いという面から見た悪は、やはり、自己本位な利害しか求めない悪とは根本的に異なるものである。「いやしい」犯罪は、「情熱的な」犯罪」と対立する。「……」このうえもなく人間の文学こそ、情熱の丘なのである。それだからといって、情熱は呪いを免れるということはない。ただ、この呪われた部分こそ、人間の生のなかで、この上もなく豊饒な意味をもつものにあてられた唯一のものである。

これこそブレイクの言う天国と地獄の結婚という心的位相である。まことに復讐の悪を尋常ならざる強度に生きること尋常なる常識のあなたへの生の知恵の宮殿にヒースクリフは到達したといえるかもしれない。

だが、それはそれとしてこうした悪魔的(というか善悪の彼岸の)知恵はキャサリン二世によつてあつさり否定されている。そこに保守的な、あまりにも保守的な『嵐が丘』の裏面が窺える。ようやくキャサリン二世の結婚愛について語る時がきたようだ。

(4) 結婚愛

『嵐が丘』はキャサリン一世の話で完結してもよさそうなくらいなのだが、退屈なくらい長々とキャサリン二世の物語が展開される。それで虚心坦懐に読めば、作品の最後にその結論がくるのが定石だからし

て、作品はキャサリン一世と二世を比較して後者によって前者を乗り越えようというメッセージをその効果として發揮しているさまが看取されるはずである。端的に言つてそれは母親の情熱恋愛を否定し、娘の結婚愛を肯定するという主張である。しかもその結婚愛は友愛結婚といえるものになっている。これを明確にするために、情熱恋愛や結婚愛を含めた西欧の、イギリスの結婚をめぐる社会史を想起しよう。

俗説とは違つて原始時代は乱婚ではなく、一夫一婦制であつた。だが、そこでは近親相姦が問題となつており、それを回避するために部族間での交叉従妹婚などが採用されていたのである。これはすでにふれたが、それが部族社会から国家が成立すると、法的な結婚制度が導入されることになる。西欧の場合帝国となつたローマがキリスト教を国家宗教に定めた時、結婚が法的な宗教的の制度として導入された。だがストーンによれば、イギリスでは不安定な一夫多妻制が一般的(13)であり、ようやく一三世紀になつて教会が結婚法を定めて統御しはじめ、一夫一婦制という原則を主張し、近親相姦の禁止や、姦淫や姦通を罰し、私生児たちを財産相続から排除することになつたのである(13)。したがつてミシエル・ソルのいうように「キリスト教徒にとつて一千年の間、結婚が一夫一婦制で解消不能のもの、両者の結合に基づくものであることは自明ではなかつた」(172)。じつさいカトリックでは一四三九年になつて結婚は秘蹟の一つに昇格し、カトリックが拘束力のある結婚に立ち会つたのは一五六三年のことである。また英国国教会では、ようやく一七五四年以後、口頭による結婚ではなく、教会で行われる結

婚のみが法的拘束力をもつようになる。

というわけで、すでにふれたが、ヒースクリフがリントンをキャサリン二世と強引に内輪で結婚させたのは非合法ということになる。だが、たしかにふたりの結婚は強要されたのだが、小説は二人の関係を相思相愛の間柄として描いている。キャサリン二世は父エドガーに内緒で、リントンはヒースクリフに強要されながらも、従兄妹同士という血の親密さの土壤に恋を实らせたのである。完全に家父長が結婚を牛耳る家と家の結婚などではなかつた。こうしたストーンのいう「友愛結婚」を唱えたのは一七世紀の説教者がはじめらしい。その後一五〇〇年から一八〇〇年にかけて三〇〇年間に「家父長的な文化から情愛的個人主義への文化の移行があつた」(3)のである。そして「一七八〇年以後、ロマンチック・ラブとロマン主義文学の両方がひろまり「……」ロマンチック・ラブが有産階級の間で見苦しくない結婚の動機となつた」(235)ようである。だとするならキャサリン二世とリントンやとりわけヘアトンとの結婚は、こうした時代の流れに即してみれば、ロマンチック・ラブから友愛結婚へというケースの一事例であるといえる。

キャサリン一世は「ヒースクリフは私だ」などといつて合一による愛を語っている。だが、それは見ているのは自分だけで、他者は眼中にないという独善的な愛の在り方ともいえる。これにたいしてキャサリン二世はリントンとの愛をこう語っている。キャサリン二世は長患いで腐つているリントンのわがままを耐えながら支えている。そうし

た自分のリントンへの思いをいみじくも「あたしはあんたよりパパを愛しているんだからね」(563)という風に表現している。ということはその愛は父親への情愛や家族愛と同列の愛なのであり、まずもってそれは性愛でなく、敬愛であり、思いやりであり、献身である。性愛のエロスのエゴイズムではなく、一言で言えばアガペーの愛というべきものだろう。まことにキャサリン二世はリントンとの仲違いのあと直しする際にお互いに許し合おうというのである(524, 648)。じつはこの許しの主題も決して唐突ではない。周到にも物語のそもそもの始まりから提示されている。それはそれこそいかにも唐突で不可解なロックウッドの夢においてである。

物語の冒頭語り手のロックウッドは天候不順のため否応なく嵐が丘に一夜の宿をとるのだが、そのとき不快な睡眠のなかで教会でのジェイベス・ブランドラム師の罪と許しについての説教の夢をみる。それは七の七〇倍の罪をも許すべきだというものだが、ロックウッドは四九一回目の罪を許されずにまさに罰せられリンチされそうになつてうなされたまま目覚めるのである(45-49)。ロックウッドのかかえた無意識の罪は、しいていえば自己の欲望に不正直で、女性に気をもたせながら袖にした罪(11-12)などが想定される。いずれにしろロックウッドはキリスト教の熱心な信者ではないが、キリスト教倫理に深層心理で深く捉われていることの証といえるだろう。あるいは、次に見るキャサリンの幽霊(激越な愛の具象化)の夢はロックウッドの抑圧されたイドの形象——実際ロックウッドはキャサリン二世を

見て魅力感じていた(21)——などと解釈可能だろう。だが、ぼくらにとつて問題なのは、ロックウッドの精神分析ではない。この夢が罪と罰という作品の主題を暗示していることである。そしてヒースクリフは許しを断固拒否し、復讐を敢行しているのだが、これはヒンドリーのイジメに対する許しの限界を超えて実践されたヒースクリフみずからが下した懲罰ということになる。ところがキャサリン二世はといえば、リントンのわがままを許し(524)、みずからはヘアトンから自分の働いた無礼を許されているのだ(646)。要するにこの悪夢のエピソードは許すことと許さないことの対比のために設けられているのであって、「許されざる罪」といった宗教的問題の提示ではない(廣野51)。

キャサリン一世の恋はあくまで自己本位である。これにたいしてキャサリン二世のそれは父親に次いでリントンを愛しているといった言い方に端的に窺える他者への愛である。こうした二つの愛の形をルージュモンはこう言っている。「正統的キリスト教はこの世の生にありながら、神と魂との〈靈的婚姻〉にいたりつくが、一方異端は、肉体の死を越えた彼方に、全的な合一と融合を希望するのだ」(217)。両者の相違は、キリスト教の祝婚的神秘主義と神人合一的神秘主義(222)であり、神との来世での合一 union か神との現世での親交 communion(225)のそれであるということになる。これは人間関係に置き換えれば、キャサリン一世の場合はまことにこの合一の愛だが、キャサリン二世の愛は親交の愛であるといえるだろう。とはいえ、キャサリン二世の場合はキリスト教的というよりもっと世俗化された友愛に基づく愛である。

それはキャサリン二世とヘアトンの関係により鮮明に現れている。

キャサリン二世はリントン亡き後、もう一人の従兄であるヘアトンと親密になる。ヘアトンははじめからキャサリンを憎からず思っているが、キャサリン二世が自分の無知や粗暴さを軽蔑しているために、拗ねて寄りつかない。ところが、ここでもふたりがいとこ同士であるという親密さが手伝って次第に打ち解け、挙句はキャサリン二世がヘアトンの勉強を見るといったことになり、無邪気なまでの恋愛感情が醸成されていくのである。ここに読める寓意はといえば、当初の野生と知性の対立が、結末には知性による野生の統合に到るというものである。しかもそれが女性のリードによって成就するという点にこの小説の女性優位とするフェミニズムが看取できる。すでにふれたとおり結婚の形態は家父長支配からロマンチック・ラブに移行しつつあった。とはいえ、「女性の男性への従属は、一六世紀から一八世紀にかけて「……」深ま」り、「フランスおよび英国における既婚女性は、以前の独立した法的人格の大半をすでに失っていた」(デイヴィス146)こともまた史実である。プロンテのヴィクトリア時代、女性は良き妻良き母として家庭に封じ込められてしまっなかでのこうした女権の主張は、『ジェイン・エア』や『ミドル・マーチ』などにも観察できるのだが、注記しておきたい。いずれにしろこれはたんなる性愛ではない。恋ではあるが、相互を信頼し知性を高めるために共同するという友愛を基礎にした愛着である。二人の結婚の形はまさに友愛による結婚ということになる。

ヒンドリーとフランセスの恋愛結婚も同じである。ヒンドリーは父に相談せずに無断で結婚しており、そこには父権ではなく、経済的な打算でもなく——フランセスはこの馬の骨ともわからない素性定かでない女だった——まさに愛情だけが結婚の動機であった。それでフランセスが産後死去すると自暴自棄的になることもその愛情の深さを証明している。キャサリン一世にしてからが、エドガーとの結婚は、一種のシンデレラ・ストーリーを実現したロマンチック・ラブといていい。ヒースクリフが不在であった三年間は幸福そのものであったとネリーも証言している(193)。

こうしてみるとこの作品では結婚愛が情熱恋愛をだまっして否定しているということになる。じつさい、キャサリン二世の話が一世の話の後にくるわけで、物語は結末に物語全体の価値観を結論付ける効果があるからである。そればかりではない。作品の分量という物理的な量もまた後半が多くなっているのだ。流布本では全34章は通し番号になっている。だが初版は二巻からなり、第一巻(1章〜14章)、第二巻(15章〜34章)となっている。そのうち冒頭の三章がロックウッドの嵐が丘訪問(1〜3)で最後の三章(32〜34)がロックウッドの再訪に割かれている。こうしてみると大雑把にいつてキャサリン一世の物語は第一巻の11章であり、キャサリン二世の物語は17章が割り当てられているということになる。キャサリン二世の物語が強調されているといえるだろう。もっとも廣野は第二巻の最初の三章を第一巻の続きととり均等に配布されていると読んでいたのでこれはかならずしも客観的

な解釈とはいえないかもしれないが、原作が第一巻と第二巻に分けられている事実もまた事実として受け止めるべきだろう(191)。

それはそれとして、いまいちど登場人物の関係図を思い出してみよう。この二組の家系に無縁な(血縁関係のない)存在はロックウッドであり、ネリーであり、ヒースクリフである。ロックウッドは単なる旅行者で、ネリーの話の聞き手であるが、それを書き記す存在ではない。まったくの聞き手として虚構された人物で、恋愛に臆病な(528)、人生にもこの物語についてもたんなる傍観者の役割を演じている。ネリーはといえば、ヒンドリーとの近しい間柄だが、物語のなかではついに家政婦としての立場を変えることはなかった。「ふたりとも『キャサリン二世とヘアトン』ある意味ではわが子みたいなもの」(662)といいながら両家の家系のなかに参入することはついになかった。ヒースクリフにしてからが同じである。両家の財産の詐取に狂奔し、ままとその所有者となりロックウッドには「田舎の地主さま *squire*」(9/5)と見えるまでになったのだが、その一粒種のリントンが早世したために、自分の血を両家の家系に残すことはできなかった。これにたいしてキャサリン二世と結婚するヘアトンは、ヘアトン・アーンショウを名乗って嵐が丘を受け継ぐ存在となるのである。しかもその野兎の意味を持ついかにもイギリス的で生命力を連想させる名前は、じつは嵐が丘の建物の入り口に刻まれた先祖の名前と同じであり、そこに示された一五〇〇年という年号を考慮にいれば、まさにヘアトンは、バラ戦争後、ヘンリー七世(在位1457〜1509)がイギリス統一

を果たし、近代イギリスが誕生した頃からの伝統を受け継ぐことを寓意していると読めるだろう。バラ戦争がリチャード三世というヨーク家を篡奪した男を排除したものであつてみれば、これはヘアトンがキャサリン二世とはからずとも結託して自分の家宅を詐取した他所者のヒースクリフを排除したことの予表、アーキタイプ(原型)であるといえるかもしれない。そうしたイングランドの伝統からこつそりというか冷然としてヒースクリフは排除されているのである。ヒースクリフの具現する悪魔主義やポストコロニアリズム的批判精神はあつさり抹消されている。(不可解にも墓地ではヒースクリフはキャサリン一世を間にしてエドガーとなかよくなるんで埋葬されている。これは悪霊を宥めその徘徊をあらかじめ排除せんとする姑息な手段とも読める。)残つたのはわずかにフランセスの血である。フランセスは身元不明であるが、その名前がフランスを連想させる。してみれば、事実として提示されているのは、この地ハワースに、つまりはイングランドに受け入れられる外部の血はフランス(西欧の白人)のそれではないかということになる。しかもイングランドの王室は元来フランスの血が流れているのであつてみれば、これもまた伝統にしたがったまでだ。そればかりではない。みてのとおりご丁寧にもキャサリン二世の婚姻は交叉いとこ婚という前近代的な遺制に従っている。どうだろう『嵐が丘』は反逆の情熱的恋愛小説として愛読されてきたのだが、じつは純正の保守的伝統の継承を黙って語っている結婚愛の小説といえまいか。

参考文献

- G・バタイユ『文学と悪』一九五七、山本功訳、紀伊国屋書店、一九五九。
- Emily Brontë. *Wuthering Heights*. 1847. Edited with an Introduction by Ian Jack. Oxford: Oxford University Press, 1983. 邦訳、E・ブロンテ『嵐が丘』鴻巣友季子訳、新潮文庫、二〇〇三。引用頁の表記は(邦訳/原書)とし、単独の場合は邦訳の頁。
- Norman O. Brown. *Life against Death: The Psychological Meaning of History*. 1959. London: Sphere Books, 1968.
- S・T・コールリッジ『談話集』野上憲男訳、旺史社、二〇〇一。
- ナタリー・ゼーモン・デーヴィス「女性上位——性の象徴的逆転と近代初期ヨーロッパにおける政治的混乱」バーバラ・A・バブコップ編『さかさまの世界——芸術と社会における象徴的逆転』一九七八、岩崎宗治、井上兼行訳、岩波書店、一九八四、143～198頁。
- 廣野由美子『嵐が丘』の謎を解く』創元社、二〇〇一。
- 川口喬一『小説の解釈戦略』福武書店、一九八九。
- クロード・レヴィ・ストロース『構造人類学』一九五八、荒川幾男、生松敬三、川田順造、佐々木明、田島節夫訳、みすず書房、一九七二。
- W・S・モーム「エミリー・ブロンテと『嵐が丘』」、『世界の十大小説』一九五四、下、岩波書店、一九九七。
- 大熊昭信『ウィリアム・ブレイク研究——「四重の人間」と性愛、友愛、犠牲、救済をめぐる』彩流社、一九九七。
- ドニ・ド・ルージュモン『愛について——エロスとアガペ』一九五六、鈴木健郎、川村克己訳、岩波書店、一九五九。
- ミシェル・ソ他『愛と結婚とセクシュアリティの歴史』一九八四、福井憲彦、松本雅弘訳、新曜社、一九九三。
- L・ストーン『家族・性・結婚の社会史——1500年～1800年のイギリス』一九七九、北本正章訳、勁草書房、一九九一。
- ジョン・サザーランド『ヒースクリフは殺人犯か?——19世紀小説34の謎』一九九六、川口喬一訳、みすず書房、一九九八。
- Emanuel Swedenborg. *The Delights of Wisdom Pertaining to Conjugal Love*. Trans. by Samuel M Warren. 1768. New York: Swedenborg Foundation, 1971.
- Evelyn Underhill. *Mysticism: A Study in the Nature and Development of Man's Spiritual Consciousness*. 1911. London: Methuen, 1967.
- ウィリアム・ワイラー *Wuthering Heights*. 1939°. M G M・D V D、2007、発売元20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン。